

学生が被災地から学んだものとは

——アクターネットワーク理論から考える——

高橋 真央

What did the Students Learn from the Fieldwork in Kamaishi: Thinking from Actor Network Theory

TAKAHASHI Mao

Abstract: The purpose of this paper is to analyze the fruits of students who visited Kamaishi City, Iwate Prefecture, which was affected by the Great East Japan Earthquake in utilizing the Actor Network Theory. The Actor Network Theory has been proposed mainly by Bruno Latour et al. This is a theory that, like human beings, considers non-human things and events as actors (actors) and finds out how they are linked together to create a network.

This summer, the seven students of my class and I volunteered at Kamaishi City, and visited the Sanriku Coast Area, had the fieldwork in Kamaishi as well as Otsuchi and Rikuchu Yamada. During that time, the students met many people, were influenced and shocked by various things (actors), including nature.

This article organizes actors and learning from the Actor Network Theory, focusing on the activities, reflections, and reports of the students.

Key Words: Actor Network Theory, Great East Japan Earthquake, Students, Disaster Areas

要旨：本稿は、東日本大震災で被災した岩手県釜石市を2019年8月に訪れた学生たちの学びをアクターネットワーク理論から整理することを目的とする。アクターネットワーク理論は、ブルーノ・ラトゥールらが中心として提唱してきたものである。これは、人間と同様に人間以外のモノや事象をアクター（行為者）として見なし、それぞれがどのように関連してネットワークを作りだしているのかを見出す理論である。

今回、筆者の3年ゼミの有志7名は釜石市を中心にボランティア活動、震災学習としての三陸鉄道への乗車、勉強会への参加を同地で行った。その間、学生たちは多くの方々に出会い、自然をはじめ、様々なモノ（アクター）から影響を受け、心を揺さぶられ、感じ、学ぶ体験をした。

本稿では、釜石滞在中の学生たちの活動、振り返り、レポートを中心にアクターネットワーク理論から、アクターおよび学びについて整理する。

キーワード：アクターネットワーク理論（ANT）、東日本大震災、学生、被災地

1. はじめに

(1) 釜石への旅

「先生は夏休みどこに行くのですか？」

「いつもと同じように釜石に行くけど」

「行ってみたい！私たちも行きたいです！釜石、連れて行ってください！」

これは、6月のある日の3年ゼミでの会話である。

正直に言えば、学生たちはその時の話の流れで担当教員の筆者に「行ってみたい」と言ったのではないかと考えていた。関西から東北の岩手県釜石市までは、飛行機と電車を乗り継いでも7時間近くかかる。費用も格安航空券であれば、海外へ旅行ができる程度には必要だ。そのため、時間や費用の負担も考えると、夏休みに行く希望者は2、3人程度になるだろうと予想していた。しかし私の予想に反して、学生たちは釜石行きを計画したのであった。

7月には、ゼミ旅行に参加する学生たちが知っていた当地の情報は、大まかに言えば「東日本大震災の被災地であること」「被災地で3月に開通した三陸鉄道に乗って震災学習を行うこと」「現地でボランティア活動すること」の3点であった。

こうして、ゼミ生有志7名と指導教員の筆者の8名で2019年8月17日から23日までの6日間の「釜石ゼミ旅行2019」が実施されることとなった。

(2) 本研究の目的について

本稿は、今回のゼミ旅行で学生が感じ、考え、学んだことについて、学生や筆者のレポートを中心としてアクターネットワーク理論から整理することを目的とする。

そのため、このゼミ旅行での学びから発展した考察については、別稿で論じることとする。

2. アクターネットワークセオリーについて

1) アクターネットワークセオリーとは

アクターネットワーク理論 (Actor Network Theory: 以下 ANT と表記) とは、社会的世界をできるだけフラットに見て、諸々の社会的な結びつきを組み直すための理論である (ラトゥール, 2019)。

ブルーノ・ラトゥールは、1980年代以降に主要な論者として ANT を提唱し、活躍してきた (久保, 2019)。彼は著作の中で科学技術社会論の学術的領域において ANT を理論的に精緻化し、その上で広域な範囲で ANT を展開している。また、その理論は科学技術だけに留まらず、人類学や哲学、社会学等にまで及んでいた (久保, 2019)。

ANT の特徴については、次のような点があげられる。ANT について久保 (2019) は、「技術」や「自然」「社会」を還元不可能な諸要素 (アクター) が結び (ネットワーク) ついていることから出発することだと説明している。また金は、ANT は人間以外の多様なアクター (統計データ、文書、文化コンテンツ等) も人間と対等の作用をもたらすとした (金, 2018; ラトゥール, 2019)。

ANT を提唱する中でラトゥールが着目したのは、アクター (actor)、つまり行為や行為者の存在である。彼は、ANT において「アクター自身に従うこと」(2019, p.27) が必要だと述べている。またアクターは、多様な行為者群の結び目として捉えることだとした。そして、この行為者群を紐解いていくことで、様々なアクターのネットワークが浮かび上がっていくのだとした (ラトゥール, 2019)。ANT における「『アクター』とは、行為の源ではなく、無数の事物が群がっている動的な標的」(ラトゥール, 2019, p.88) と定義したのである。

久保 (2019) は ANT におけるアクターについて「アクターを追うことは、ネットワークに連なることに他ならない」(p.53) と強調した。続いて研究者自身においては「ネットワークの動態は所与のルールや構造によって規定されない」(p.53) と言及した。つまり、特定の領域の中に連なっている研究者もまた多岐に及ぶ関係性を描き出し、さらにその再編を提示することができるのだとした。

すなわち、ANT は人間および人間以外のモノや事象であるコトが一人前のアクターとして着目され、それを原点として様々な動態や時には繋がっている各々の存在から生まれる変容を見逃さず、また各々の存在が単体で成立するのではなく、常に連関していることから考察する理論である。

(2) 本研究におけるアクターネットワーク理論について

本稿では、上記に述べた ANT の特徴を活用し、今回のゼミ旅行における学生たちの学びを ANT の枠組みから分析する。その理由は以下の通りである。

第1に、ANT において社会を理解することは「人間と人間以外のアクターによる異質な結合を通じて構成されるネットワークの世界」(金, 2018, p.45)として認識することである。学生が得た釜石での学びは、出会った地元の人々だけではなく、被災地に足を踏み入れて、五感を使って感じ、考えたこと等による。そこには、学生が触れたり、見たり、聞いたりした自然の様子、街並み、活動の中で使われたモノなども含まれる。

本ゼミ旅行での学びは、旅行中に会った人々との関わりだけで説明することはできない。彼女たちの初めての体験や抱いた感情の中で出会った、日常的に見落とされがちな些細な事象でさえも学びの根源となっているからである。それらを ANT の特徴である人間以外のモノやコトも一アクターとして人間と同様の作用をもたらすという観点から、それぞれを連関する事象を分析する枠組みを本研究でも活用することで、本研究の中でのアクターネットワークを解釈することが有用であると考えたからである。

第2として、ANT では研究者自身もアクターネットワークの一アクターとして行為に参画している、と考えている点である。久保(2019)は、研究者自身も異種混交的なアソシエーションの社会の内側で生きていると述べている。そして、その社会の中で研究者ができることは、自身もアクターの一員としてそこに連なりながら、アソシエーションを組み替えていこうとするアクターの動きを追うこと、その行為から学ぶことである(久保, 2019)。この ANT の研究者の位置づけこそが、今回の筆者自身の立場であった。筆者もまた、このゼミ旅行の中で担当教員として学生に影響を与えている。その意味では、ラトゥールや久保が提示したように、筆者の存在や語りはアクターとして学生や釜石の人々、訪れた場所と共にアクターとしてのネットワークを形成していたと考えられる。そのため、筆者の存在を中立の立場として見過ごすことは難しい。だからこそ、学生と筆者を中心としたゼミ旅行での学びを ANT で明らかにすることに有効性を認めることができるのではないかと考えた。

主に上記の理由から本稿は ANT の概念的枠組みを活用する。ANT を利用するため、ある程度の詳細な記述が必要とされる。そのため第3章ではゼミ旅行の訪問先である釜石などの地域の概略や機関、日程や活動内容等について詳細に綴った。第4章では第3章での筆者の記録をベースに、学生のレポートから今回のゼミ旅行の学びをまとめる。

3. 釜石のゼミ旅行

(1) 訪問先について(釜石市、鵜住居地区、大槌町の概況)

今回、学生がゼミ旅行先として訪れたのは岩手県釜石市である。岩手県南東部の三陸海岸南部に位置しており、水産業と共に日本の近代製鉄業発祥の地として「鉄と魚のまち」として発展してきた。現在の人口は、33,167人となっており、少子高齢化が進んでいる(釜石市, 2019^a)¹。

第2日目に三陸鉄道に乗車して被災地を訪問した釜石市鵜住居地区および大槌町についても簡単に説明しておく。

釜石市鵜住居地区は、釜石地区から車で国道45号線を北上した15分程度のところに位置する。2019年ラグビーワールドカップにおいてフィジー対ウルグアイ戦が行われた釜石鵜住居復興スタジアムがある。しかしながら、東日本大震災では、釜石市内で最も多くの犠牲者586名を出した地区でもあった(釜石市, 2019^b)。

またその隣にある大槌町では、東日本大震災では震災関連死などを含めると1,286人が犠牲となった(大槌町, 2019年)²。

(2) ゼミ旅行の日程

今回は、6日間の日程で釜石を訪れた。表1が日程表である。2019年8月17日から22日までの5泊6日であ

1 東日本大震災では1,064名が犠牲となった。家屋被害では住家数の約3割にあたる4,704戸が被災した(釜石市, 2019^b)。

2 津波の犠牲者数は当時の人口の約8%にあたる。町の主たる施設も大きな被害を受けた。さらに大槌町の町長や役場幹部職員の多くが津波で流され、行政機能が停止したことから復興が立ち遅れたと言われている(関, 2013)。

最近では津波の被害を受け、その中で28人が犠牲となった大槌町の旧庁舎の一部保存・解体の差し止めをめぐって大きな議論が交わされていたことでも知られている。この旧庁舎は2019年1月に解体され、現在は整地されている。

った。学生 7 名 (A, B, C, D, E, F, G) と教員である筆者の合計 8 名で行動を共にした。

1) 活動先について

今回のゼミ旅行の活動先として、宿泊先およびボランティア受け入れ団体である「カリタス釜石」³ および第 2 日目の震災学習列車として釜石-宮古間を乗車した「三陸鉄道山田線」⁴ については、学生の活動や学びの中でも非常に大きな影響を及ぼした。

2) 活動日程について

釜石に滞在したのは第 1 日目から第 5 日目の 5 日間であった。その間にどのような活動や体験があったのかについてここに記述する。

表 1 釜石ゼミ旅行 2019 の日程表

	日程		活動内容など	宿泊先
第 1 日目	8 月 17 日 (土)	08:00 09:00 10:25 17:00 18:00~	伊丹空港集合 伊丹空港発 仙台空港着 仙台駅 (11:50) →小牛田→一ノ関→花巻→釜石 (16:41 着) カリタス釜石着 釜石&神戸チーム 交流会	カリタス釜石
第 2 日目	8 月 18 日 (日)	07:30 07:50 08:02 09:14 09:47 11:45 12:24 14:13 15:20 17:18 17:36 着	三陸鉄道 釜石駅 集合 釜石発 鵜住居着 ・「釜石祈りのパーク」 ・「いのちをつなぐ未来館」 鵜住居発 陸中山田着 陸中山田発 宮古駅着 (漁鮮市場で昼食) 宮古駅発 大槌着 「おしゃっち (大槌町文化交流センター)」 大槌発 釜石駅着	カリタス釜石
第 3 日目	8 月 19 日 (月)	08:30 09:00~ 16:00 16:30 17:00~ 19:00	ラジオ体操・朝のミーティング ボランティア活動 ・「ふいりあ」での卓球大会と昼食準備 ・「ふいりあ」での「お茶っこ」 本日の振り返り R 氏, K 氏による震災勉強会 「3.11 その時何があったのか~釜石のぞみ病院にて~」	カリタス釜石

3 宿泊先、活動先であったカリタス釜石はコミュニティ支援を中心に行ってきた NGO 団体である。カトリック釜石教会の敷地内にあり、震災直後から教会の談話室「ふいりあ」を開放し、サロン形式の傾聴活動や市社会福祉協議会が主催する「お茶っこサロン」への協力を行っている。現在に至るまで 8 年半、カリタス釜石は、「ふいりあ」での活動や仮設住宅や復興住宅の集会施設で開催される「お茶っこ」の活動を行い、お年寄りを中心とした語らいの場を提供している。またカトリック教会や学校を中心として全国から様々な世代の多くのボランティアがここに集結し、活動を行っている。

4 〈三陸鉄道山田線〉

東日本大震災までは JR 山田線として釜石-宮古間を運航されていた。震災以降、本線は不通となっていた。2019 年 3 月に本路線は JR 東日本より三陸鉄道に移管された。移管と共に、8 年の歳月をかけてようやく三陸鉄道山田線は復旧し開通した。これにより、三陸の人々の足としての役割を鉄道がとり戻したと共に、新たな観光客の集客が期待されることとなった。しかし、残念ながら、2019 年 10 月 27 日現在、台風 19 号の被害を受け、三陸鉄道山田線は運休し代行バスが運行している。

第4日目	8月20日(火)	08:30 09:00～ 16:00 16:30 22:00	ラジオ体操・朝のミーティング ボランティア活動、復興住宅など ・午前、午後2グループ(各4人)分かれて、「ふいりあ」と復興住宅の「お茶っこ」で活動 本日の振り返り 4日間の振り返りミーティング(学生、教員)	カリタス釜石
第5日目	8月21日(水)	08:30 10:14 16:00	ラジオ体操・朝のミーティング JR釜石駅 出発→花巻→一ノ関→小牛田→仙台 JR仙台駅 到着	仙台市内ホテル
第6日目	8月22日(木)	11:45 13:05	仙台空港発 伊丹空港着(伊丹空港にて解散)	

第1日目(8月17日)

釜石駅から宿泊先のカリタス釜石までの1.5キロ近くの道中、夕方の西日を浴びながら、キャリーケースを携えて筆者自身が震災後に初めて釜石に来た2011年12月当時の町の景色や状況、地元の方々から聞いた震災直後の様子について説明しながら歩いた。ビルや鉄道の高架下にかかれてある「東日本大震災の津波の高さ」の標識を目にした学生たちは、自分たちの背をはるかに超えた高さまで川を北上して津波が来たことに驚いていた。

また、学生たちは新しい建物や店舗、大型商業施設などが立ち並んでいる街並みに被災地として発災直後にテレビで観ていた景色とは全く異なること、震災から8年半の歳月が経ったことに改めて気づかされたようであった。

第2日目(8月18日)

早朝7時半に三陸鉄道釜石駅に集合し、神戸チームとして前日に顔合わせをした防災やまちづくりの専門家や釜石を長年応援してきたメンバー十数名と共に、釜石のNPO事務局長のK氏の案内の元に釜石発の電車に乗り込んだ。

最初の下車駅は鶴住居であった。K氏がまず学生たちを連れて行ったのは、3月に完成した「釜石祈りのパーク」であった。ここには、東日本大震災慰霊碑として、震災で亡くなられた釜石市民の方々の1000名近い芳名板が設置されていた。そこでK氏は、自身の親戚や知り合いの数名の名前があることをそれぞれの銘板をなぞりながら話してくれた(神戸新聞, 2019)。

この「祈りのパーク」がどのような場所であったのかを防災市民憲章碑の前でK氏が話をした。ここは、海辺から1kmほどの場所にも関わらず「防災センター」という名称であったために、震災時に多くの方が避難し、津波の犠牲となった鶴住居地区防災センターがあった場所だということであった。それは「釜石の悲劇」とも呼ばれていることも付け加えられた。

その後、駅前広場にある「いのちをつなぐ未来館」を訪れた。その中にある展示から、駅のそばに新しく建てられた釜石鶴住居復興ラグビースタジアムは、当時、鶴住居小学校と釜石東中学校の跡地であること、小学生や中学生が自分より小さい子どもたちの手を引きながら2km近い道のりを走って逃げたことから全員が助かった「釜石の奇跡」の場所であることを学生は知った。

また館内の別の展示では、震災直前の3月に防災センターが建てられ、その竣工式を祝うために地元の方たちが集まっている写真があった。当時はコミュニティセンターの役割を目的に建てられたが、防災施設としての機能を果たしていることを謳うことで予算がより多く執行できたことから、施設の名称に「防災センター」とつけられたために震災時に多くの方がセンターに避難し、津波の犠牲となったこと経緯が書かれていた。学生たちは「釜石の奇跡」と「釜石の悲劇」の両方が掲示されている展示物を読み、写真を1枚ずつ食い入るように見ているが、それぞれに言葉を発することはなかった。

その後、三陸鉄道に再び乗車した。三陸沿岸部の特徴的なリアス式海岸を車窓に見ながら、盛り土によって変化した吉里吉里や浪板海岸について神戸の防災の専門家より説明を受けた。

陸中山田駅で下車をすると、学生の目に飛び込んできたのは車窓から見た美しい海を遮る灰色のコンクリート

の3メートルに及ぶ壁であった。この壁は防潮堤であり、海岸は全て防潮堤で覆われていた。防潮堤を越えて海岸まで出ると、山田湾を覆う山々や入り江が見えた。足元には魚が泳いでいることが分かるほど澄んでいる海があり、磯の匂いが潮風と共に鼻をくすぐった。8月の暑い太陽の日差しを感じながらも、潮風の心地よさを感じた。海岸まで行かなければ分からない、海の恵みを体感したひと時であった。

その後、終点の宮古に行き、昼食を取り、帰路再び三陸鉄道に乗車した。

帰路は大槌で下車した。ここでは、2018年に造られた「おしゃっち(大槌町文化交流センター)」を訪問した。また防災専門家のM氏の計らいで、津波に流される以前の大槌町の様子分かるジオラマをもとに町の職員の方にお話をいただいた。さらに震災伝承室では震災前の大槌がどのような町であり、津波によってどのように町が消えてしまったのか、そして震災後に大槌の人々はどのように復興を行ってきたのか、という構成での映像を観た。その傍には「岩手県大槌町東日本大震災記録誌 生きる証」という震災後、苦難に立ち向かいながらも必死で大槌町を立て直してきた人々の話がまとめられている冊子があった(大槌町, 2019)。また大槌町で亡くなられた方々一人ひとりの記録がまとめられている分厚い冊子も並んで置かれていた。そこには津波で亡くなられた方々がどこに住み、どのような人生を送られたのかが写真と共に2ページずつ簡潔にまとめられていた。それらを1ページごとにめぐりながら、大槌駅からここまでの数百メートルの間に見てきた景色の中でどのようなことが起こったのか、その地でどのような背景や家族を持った方が亡くなったのかを学生たちは初めて知ることとなった。

大槌駅までの帰路、盛り土によって整備された復興住宅と更地が混在している中を歩いた。復興住宅が点在している現在において「復興計画はどの程度進んだのですか?」と同行していたM氏に学生が尋ねると、「ほとんどここは終了したはずですよ」という答えが返ってきた。あたりには復興住宅区画とそれを上回る広さの更地を所々で見かけた。半時間程前に観た震災前の映像やジオラマと比較すると、人の賑わいや生活を感じられるような街並みとは言い難い集落であった。

その後、大槌駅から釜石駅まで戻り、この日の震災学習は終了した。

第3日目(8月19日)

この日から2日間、カリタス釜石の活動にボランティアとして参加した。

午前中は卓球大会と昼食の準備チームに分かれて活動を行った。昼食では、学生が作ったお好み焼きと焼きそばを共に食した。お年寄りから「おいしかった、ありがとう。これは特別なお好み焼きなの?」と聞かれ、学生は笑顔で「普通のお好み焼きです!」と答えていた。午後には8名がお年寄り卓球をしたり、折り紙を教えて頂いたりしながら釜石や家族の話をして過ごした。

夕方のカリタス釜石でのミーティングの後、前日に鶴住居などを案内してくれたK氏とR氏に「3.11 その時、何があったのか～釜石のぞみ病院にて～」というテーマで学生に向けて話をしてもらった。

当時、釜石のぞみ病院で看護師として働いていたR氏の話学生たちは、メモを取りながら熱心に耳を傾けていた。R氏は3月11日当時の病院の様子を話してくれた。釜石の町中のあちらこちらから多くの人が小高い丘にある薬師公園に避難した後、保育園の子どもをはじめ、避難してきた人を全て病院で受け入れたこと、病院はそのあたりでは当時唯一の9階建ての建物であったことから600人以上に及ぶ人が避難してきたことを語ってくれた。入院患者以外に大量の避難者が病院に集結したことで彼らを収容する部屋が無かったことから、廊下や待合室など全てを避難者に開放し、病院内のありとあらゆる物資やカーテン、シーツ、食料などを調達して暖を取り、寒さを凌いだこと等の話であった。また津波の翌日以降の病院での様々な出来事⁵をスライドの写真を見せながら語ってくれた。

K氏は当時の釜石の状況や市民の避難の様子を話してくれた。震災から現在までの復興の状況や支援についての話もあった。K氏は全ての話が終わってから最後にR氏がナレーションを担当した「復興カメラ」の映像を数分間流した。前日に歩いた鶴住居、大槌、釜石の震災直後の写真。そして四季折々の三陸沿岸の自然。地元の人々が被災した中で逞しく復興に向かう姿。8年間の歳月の流れがこの映像の中に凝縮され、それぞれが映像に吸い

5 看護師のための臨時保育室の開設や患者を搬送するために内陸部の病院に自衛隊の搬送用トラックに同乗したこと、避難者代表たちと毎朝ミーティングの機会を設けたことで病院側との連携を円滑にしたこと等

込まれていくようであった。

映像が終わった後、釜石の自然の写真から K 氏はこのように呟いた。「あの時、4月になって桜が咲き出した頃、何があっても桜は咲くのだと思うと辛かった」と。そして、震災で亡くなった友人の話をぽつりと話してくれた。

最後に学生一人ずつが涙を浮かべながら、K 氏や R 氏の話聞いた感想を述べ合った。

学生は K 氏、R 氏に「私たちができることは何でしょうか?」「復興とはどこまで来たら『復興した』と言えるのでしょうか?」と言った質問を最後に投げかけた。

K 氏は学生の質問に対して、「来てくれることが有難い」と答えた。そして「復興については、皆さんの知っている神戸の方たちに聞いてほしい。私たちの先輩ですから」そして「いつか自分が『復興した』と思った時こそが『復興した』ことになるのかもしれない」と話した。R 氏は阪神淡路大震災のことをあげながら、「神戸と東北は兄弟だと思っている。だから、皆さんが来てくれるだけで有難い」と付け加えた。

K 氏と R 氏が話してくれた言葉の一つひとつが学生の心に突き刺さったようである。宿泊先への帰路、いつも元気な彼女たちが沈黙のうちに、自分たちが歩いているこの場所でそのようなことが起こっていたことを必死に受けとめようとしているようであった。

第4日目（8月20日）

前日と同様に朝のミーティングを経て、敷地内の「ふいりあ」と復興住宅で開催されている「お茶っこ」の活動をする事となった。

復興住宅は、カリタス釜石から徒歩7分程度の場所である。どの復興住宅にも集会所があり、スタッフとボランティアが日曜日を除いて毎日開催している。10時から15時の中で復興住宅に住むお年寄りが「お茶っこ」に参加し、そこで談笑したり、折り紙や手芸品などを作ったりしながら過ごす。学生たちは前日と同様に午前と午後それぞれ場所を交代しながら「ふいりあ」と「お茶っこ」を体験した。

釜石での最後の夜、筆者はこの4日間の振り返りをするので、一人ずつ話をして欲しいと学生たちに伝えた。釜石での滞在期間、学生も教員の筆者も広い会議室で布団を敷いて寝食を共にし、同じものを見て、聞いた中で、互いに何を考え、感じたのかを分かち合うことをこの振り返りのねらいとした。

夜の振り返りは、2時間以上に及んだ。学生たちは話しながら、時折感情を抑えきれず涙を流しながら語った。この4日間の様々な体験を言葉で表そうとしても、適当な言葉が見つからず、自分自身でもどう感情を表現すればよいのか分からないままに話していることが車座にいた筆者にも理解できた。

そこに立ち会った筆者は、ほとんどの学生が堰を切ったように泣き出す情景を目の当たりにしながら、彼女たちの気持ちに圧倒され、一人ひとりの感情を教員として受け止められるか一瞬戸惑いを覚えた。しかしながら、学生たちの瑞々しい感性に筆者自身も体当たりで受け止めてみようという覚悟へと変わっていったのであった。

第5日目

最終日はこれまでと同様にラジオ体操と朝のミーティングに参加し、この4日間の活動の振り返りをカリタス釜石のスタッフや他のボランティアに向けて行った。

その後、5日前に歩いて来た道と同じ道を駅に向かって歩き、釜石を後にした。

4. ゼミ旅行を通して学んだこと～ラトゥールのアクターネットワークセオリーから～

本章では、6人の学生の振り返りのレポートから今回のゼミ旅行で彼女たちが学んだことについて考えていきたい。

本ゼミ旅行で学生たちの活動日程で体験したこと、また第4日目夜の振り返りから得られたアクターを図1にまとめた。

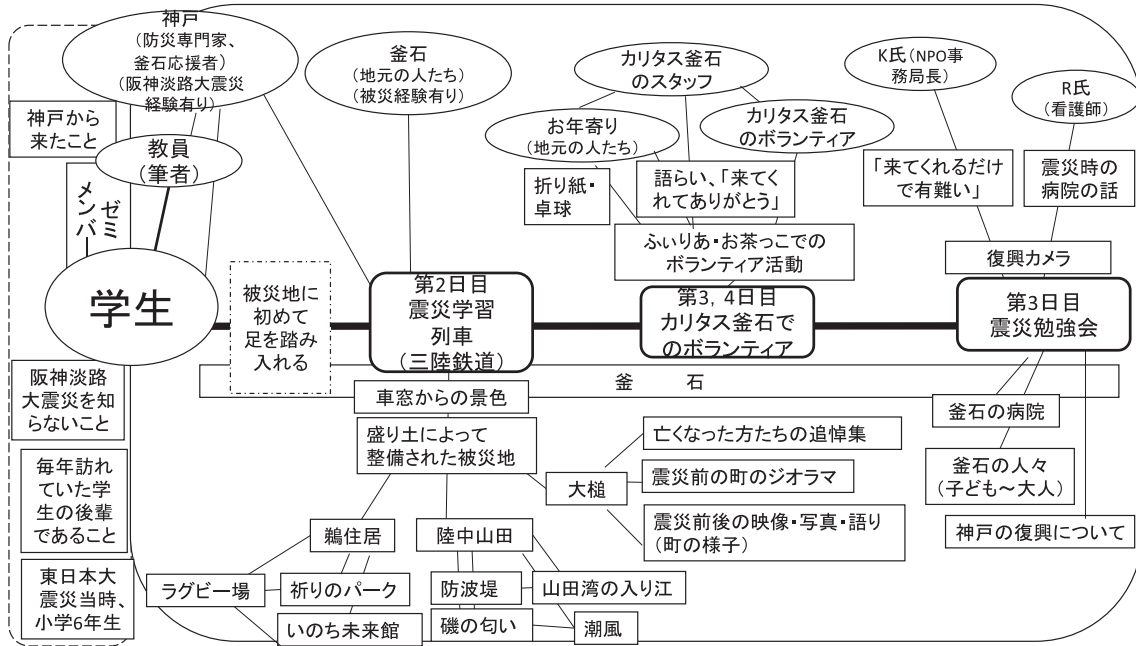


図 1 アクターネットワークから見る学生たちの学び

図 1 には、学生が釜石で出会った人やモノ、体験、そして言葉がある。それぞれのアクターが相互に作用していることが見て取れる。そして、学生は自身の内側にある様々なことにも気づかされた。

このようなアクターの繋がりを通して、学生は何を感じ、学んだのか。学生自身が書いたレポートを図 1 やアクターネットワークから考えると 6 つの項目に分けられた。

これらをゼミ旅行終了 3 日後に提出した学生レポートからまとめていく。

(1) 震災や災害の恐怖

①三陸鉄道での震災学習

学生たちが最も心を揺さぶられた体験は、震災当時の避難の状況や犠牲になった方々の話を聞いたことであった。まさに自分が立っているこの場所で 200 人近い人々が亡くなったことに恐怖を抱き、苦しさを感じたようである。

学生 B、学生 E は、震災学習として三陸鉄道に乗車したときのことを綴っている。また K 氏の話聞いた印象を記していた。さらに学生 G は、下車した鶴住居、陸中山田、宮古、大槌のそれぞれの駅の様子を振り返った。学生 F は、震災に関して色々な話を聞いたり、見たりしたことを振り返って震災の恐怖を自身に置き換えて感じた事を書いていた。

表 2-1 学生の振り返りレポートから①-1

<p>学生 B：三陸鉄道に乗っての学習では、被災した町をただ見に行ったわけではない。ただ見ているだけでは伝わってこない、過去がそこにはあった。数えきれない人とその人たちの数えきれない思い出の数々が、地震による津波で一瞬に消え去ってしまった。</p> <p>学生 E：『今は整備されて綺麗になったけどここで何人もの人が亡くなったんだな』と思うとすごく悲しくて、自分の今立っている場所が被災地なんだと改めて感じさせられました。</p> <p>学生 G：四つの駅で降りた。全て綺麗な街並みだった。でも、大槌のジオラマを見たり、鶴住居のガラガラの街を見て、復興なんてしてなかったと思った。街が綺麗になったから復興では決してない。あの当時住んでいた人々の生活はもう二度と戻らないし、失った命を戻すこともできない。それでも生きていかないといけない。感じた事のない思いだった。</p> <p>学生 F：今回色々な方からお話を聞き、今のままではダメで、このことをみんなに伝えてこの恐ろしさを共有しなければいけないと強く思いました。私はこの感情が正しいかわからないけど、率直に『怖い』『知り合いが誰も死んでほしくない』と思いました。</p>

②展示物やジオラマから

訪問先で目にした写真や映像などから犠牲になられた方やその家族、その当時の状況を考え、言葉に詰まった様子も見られた。

最初の下車駅であった鶴住居。そこにある「いのちをつなぐ未来館」を訪問した時の印象を書き残していた学生もいた。未来館にある「釜石の奇跡」の展示を見ての印象を学生 F は書いていた。そして「釜石の悲劇」と言われる防災センターの展示での印象について学生 G は書いていた。

学生 C はおしゃっちでジオラマを見た時に抱いた感情について書いている。

表 2-1-2 学生の振り返りレポートから①-2

<p>学生 F：学校の先生が生徒に『自分の命は自分で守りなさい』と声をかけた気持ち。この先生の気持ちを考えただけで涙が溢れそうになりました</p> <p>学生 G：防災センターの生々しい証言に、吐きそうになってしまった。怖かったし、それが現実起こったということを受け入れられなかったのだと思う。</p> <p>学生 C：街のジオラマを見た時、自分のふるさとをなんか思い出した。これを作った人達はどういう気持ちでこのジオラマを作ったのかなあと思った。苦しくなかったのかな、悲しくなかったのかなと思った。 (おしゃっちで) 亡くなった人々がその日に何をしていたのか記録してある本があった。数ページ読んだが、それ以上読めなかった。悲しかったし、辛かったし、もし自分の家族がそういう目になって思ったら辛くて見られなかった。</p>

(2) 自然、特に海について

陸中山田駅で下車した際に海岸をメンバー全員で歩いた時の海の印象について学生 C は語っている。学生 G は防災のために造られた高さ 3 メートルの防波堤と防災について考えた。学生 A は、海辺で感じた風やその景色に海の豊かさを感じたようであった。一方で、自分たちが目にしている穏やかな海が多くの人々の命を奪ったことに戸惑いを覚えたようである。

表 2-2 学生の振り返りレポートから②

<p>学生 C：海を見に行ったら時、こんなにも穏やかなのに、これが沢山の人の命を奪ったなんて考えられなかった。自然と共に生きる難しさをその時感じた。</p> <p>学生 G：陸中山田で観た防波堤。感じた海風。もし防波堤がなければこの風は今頃街に吹いているのだろうかと思うと、防災ってなんなんだろうなと思った。</p> <p>学生 A：訪れた時、みんなで海辺で過ごして、本当に気持ち良くて海が好きな地域の方たちからこの景色を奪っていいものではないとも思いました。</p>
--

(3) カリタス釜石でのボランティア活動

カリタス釜石での活動は、主にお年寄りと交流することであった。学生たちは、釜石における高齢者の課題、ボランティアについて考えさせられたようである。

学生 B は、「お茶っこ」でのお年寄りとの話からボランティア活動の重要性について考えた。さらに学生 C は自分たちの活動を振り返って考えていた。

また、学生 B はボランティアの関わり方の難しさも体験から学び取っていた。学生 F は出会った人たちとの語りを通してのボランティアの楽しさを知ったようである。

ボランティア活動を通して、被災地の現実を改めて感じた学生もいた。学生 E や学生 G は、活動を通して釜石という場所で自分が出会ったお年寄りが抱えている過去について考え、その時の自身の感情について綴っていた。

表 2-3 学生の振り返りレポートから③

学生 B：復興住宅での独り身のお年寄りは少なくない。だからこのような場を作るお手伝いはボランティアの一環として大切なものと思った。
ボランティアの範囲は難しいってこともわかった。どこまでがボランティアとして踏み込んでいいのだろう。

学生 C：ボランティアのあり方とか考えさせられたし、ボランティアってそもそも何?とも思ったし、私がやっていることは、人のためになっているのかな?って思った。

学生 F：私たちがボランティアに来たはずなのに逆に私が元気をもらいました。

学生 E：楽しく触れ合い笑い合っている中で、『8年前はここに笑顔はなかったんだろうな』って考えると今ある笑顔をこれから先も守っていかないといけないんじゃないかと思いました。

学生 G：ありがとうっていう言葉に何度も救われた。でも、その中でふと『この人達も誰かを失ったのかもしれない』と思うと涙が出そうになってしまった。ずっと必死にこらえていた。

(4) 「防災と減災」、そして「住み続けられる街づくり」

「防災と減災」の違いについて神戸の防災の専門家や筆者が話すと、学生たちは「減災」という言葉、その考え方に初めて触れ、衝撃を受けていた。そして、三陸の美しい海岸を防潮堤が縁取っている様子を三陸鉄道の車窓から見た学生は改めて「防災と減災」の意味について考えていた。

学生 F は、防潮堤の様子から前期にゼミで学習してきた SDGs⁶ との関わりから「人が本当に住み続けられる街づくりとは何か」について、自分が今いる被災地の現実から考えるようになっていた。

そして、学生 A はその地域らしさを生かす復興とは何かについて考えると共に、復興における街づくりの難しさについて記していた。

表 2-4 学生の振り返りレポートから④

学生 F：先生が話していた減災するか防災するか。この選択が難しいと思いました。せっかくの綺麗な海が高い防波堤によって見えなくなるのは私は反対だと思ったので、私は防波堤は無くしてほしいと思ったけど、また町を壊されるのは嫌だと思います。これが SDGs の住み続けられる街づくりなんだと思いました。町が好きでもまたいつ大きな災害がやってくるかわからない。その時に被害が最小限に抑えられるのか。それが今の気持ちだと思います。住み続けられる街づくりというのは奥が深く難しいことなんだと思いました。

学生 A：人がイキイキと住む街になって欲しいと思います。
ラグビー場を建てたり、防波堤を建てたり、大切ではあるけれど、その地域の良さを無くしてしまうことは（復興とは）違うような気がしました。
街が完璧に戻って復興した、というようなそんな簡単なものではないことを学びました。

(5) 震災勉強会

釜石の NPO 事務局長の K 氏や看護師の R 氏が震災当時の話を学生に向けて語った言葉は、学生たちが釜石での学びについて考えるためにも大きな影響を与えた。

学生 G は震災時の辛い話を自分たちにしてくれた K 氏と R 氏の思いから自分の役割について書いていた。R 氏の話を受けて学生 B と学生 E は災害時の行動について考えた。

そして、学生たちが K 氏に向けた復興に関する質問に対して、彼が「その人が『復興した』と心の中で思ったら『復興』したことになるのではないかな」と答えたことから、学生 C は被災した人たちが心で感じる復興の難しさについて書いていた。

学生と K 氏とのやりとりから、学生 C は「K 氏の来てくれるだけでありがたい、という言葉で私はすごく救われたし、私がここにいることは充分意味があるんだなって思ったらすごく気が楽になった」と書いている。

この K 氏の答えについて学生たちは滞在中、そして帰宅後も考えることとなった。最終日の夜の振り返りミーティングでも「来るだけではない、私たちに何かできるはず。もっと私たちに頼って欲しい」という言葉が学生の中から出てきた。ただ、学生たちの中でもその答えが未だ見いだせていないのが現状でもあり、今でも葛藤を抱えているようにも見られる。

表 2-5 学生の振り返りレポートから⑤

学生 G：K 氏と R 氏の話聞いた。苦しい中話してくれた彼らの言葉に私たちへの思いを感じた時、この想いは繋いでいく義務があると思った。一人が被災地にできることは小さいかもしれない。でもそれが集まればとても大きな力になる。自分にできること、話を伝えて次に来る震災に備えること、絶対に風化させないことが私たちにできる小さくもあり大きなことだと感じた。

学生 A：震災の恐怖や悲しさは伝えなくていい。そうではなく、自分たちが災害にあった時、逃げきれないように周りに伝えて欲しい、そう言われました。その言葉がとても力強くて、釜石の人たちは前を向いていると思いました。

学生 B：R さんも言っていたけど、(津波のことを)忘れてもいいけど、避難するってことは絶対に忘れてはいけない。

学生 E：自然災害において一瞬の迷いが命取りになること、逃げたら絶対に戻らないこと、“大丈夫”と思わないこと、様々な事を学びました。

学生 C：K さんのお話を聞いて、やっぱり胸がギュってなった。
心の中の復興という言葉もすごく印象的だった。心の中の復興って、多分きつと何年かかっても難しいし、完璧に復興しきるといえるのはないと考えた。

(6) ゼミ旅行を通して

学生 7 人と筆者である教員 1 名のゼミメンバーでの 6 日間は、様々な経験をし、それを分かち合った日々であった。時には、自分の感情をうまくコントロールできず戸惑う学生もいたが、傍にはいつも誰かが寄り添い、その感情を受け止めていた。

6 日間のゼミ旅行を終えて、学生たちは共に過ごしたメンバーにこう語っている。

表 2-6 学生の振り返りレポートから⑥

学生 B：私の人生の大きな思い出になりました。誰一人かけては無理だったし、皆の暖かさに本当に助けられました。

学生 F：このメンバーだったからこそ充実した 5 泊 6 日を過ごすことができたと思っています。

学生 G：みんなとミーティングで 2 時間以上意見を聞きあえたこと、感情がめちゃくちゃになりながら向き合った時間はとても貴重でした。

学生 A は最後にこの 6 日間のゼミメンバーの 8 人で共有できたことに感謝し、次のような言葉でレポートを締めくくった。「一人でもみんなでも、いっぱい考えてもがいた 6 日間は本当に大事な経験でした。ここでもらった言葉も、人の暖かさも、見た景色も絶対に忘れません。モヤモヤすることも解消できないような気持ちも、6 日間で得れた事はとても多かったです」。

時には、楽しく、談笑し合うなど、今の学生らしい体験もしていたが、日中に体験し、見聞きすることは全力でぶつかることしかできなかった。苦しかったり、悲しかったり、言葉に表現することのできないような辛さを体感したこともあったように思われる。だからこそ、そこで出会った人々や自然、そして言葉に慰められ、自分がこれから生きていくために必要な心の葛藤も味わったのだと言えるのではないだろうか。

5. おわりに

たった 6 日間の釜石でのゼミ旅行ではあったが、学生の釜石の最終夜の振り返りやレポートには、様々な学びや感情が溢れていた。

ANT の枠組みから考えると、様々なアクターが学生の釜石での体験の中で表れ、影響を与えていた。時には直接的に一アクターが学生たちの感情を揺さぶることもあった。しかし、多くは人とモノやコト、ある時には過去の記録や記憶、それぞれの背景に関連することでさらに大きな衝撃や感情の動きをもたらしたと言えるだろう。

今回、ANT の中で「アクター」に着目し、それをこのゼミ旅行での学生の学びを分析するための枠組みとして活用した。それによって、これまで漏れ落ちていたモノの存在やそれらが持つ力を改めて考えさせられた。夏の強い日差しや海風、そして磯の匂い。山々を覆う木々。新しく舗装された真っすぐな道路。復興事業によって盛り土となった更地と住宅地。震災後の人々や町の様子をまとめた写真や映像。展示室に説明されている当時の様子。冊子の中の記録として残されている犠牲者の姿など。そして、ボランティアで出会ったお年寄りの手の温もり。

東日本大震災から 8 年半が経ち被災地となった地域への関心は弱まっている。参加した学生も当時小学生であったことから、記憶も薄らいでいる中でやってきた。自分たちが当時知っていた情報は極めて少なく、意識もしないままに歳月が経っていたことを釜石に来て初めて知った学生もいた。行く先々で初めて知る被災地の課題に対して、自分の無知さに愕然としながらも、それを挽回するかのように、多くのアクターに反応し、感じ、考え、悩み、もがいた日々であったように思われる。

ANT によって、学生の被災地での学びに多様なアクターの存在が影響していることが本稿で明らかになった。しかしながら、ここまでの記述からそれらの存在を明らかにするだけで本稿は留まっている。次稿では、学生の学びから、アクターの各々の存在の意味とその役割について論じていきたい。

最後に、ゼミ旅行の帰路、1 人の学生が「このゼミ旅行で、私、変わったかもしれない。行って本当に良かった。同じ体験をして、同じものを見ても、決して皆が同じことを考えるだけではなく、皆がそれぞれ違うことを考えていた。自分と違う意見を持っていることに気づき、本当に勉強になった」と話してくれた。そして、「被災地に行ったことで、答えは常に一つでは無いこと、そして絶対に正解があるわけではないことを知った。それが本当に大きな学びとなった」と伝えてくれた。

アクターの一人として関わっていた教員としての筆者にとって 6 日間を総括した言葉であり、それを学生から直接聞いたことが心より嬉しかった。

最後になったが学生たちの学びを様々な角度から応援して下さった方々、そして釜石、大槌の様々なアクターに心より感謝申し上げたい。

〈追記1〉

本稿を執筆しているさなか (2019 年 10 月)、今回の台風 19 号によって釜石市および三陸鉄道山田線は甚大な被害を受けた。ここに謹んでお見舞い申し上げますと共に、1 日も早い復興をお祈り申し上げます。

〈追記2〉

本研究は JSPS 科研費 17K04268 の助成を受けたものである。研究代表者の竹端寛氏、分担研究者の鈴木鉄忠氏に本稿を作成するにあたり、多くの励ましと示唆に富むご助言を頂いた。ここに記して御礼申し上げます。

【参考文献】

- 釜石市, 2016, 「釜石の実像 (釜石市人口ビジョン)」
http://www.city.kamaishi.iwate.jp/shisei_joho/keikaku_torikumi/chihouseusei/detail/_icsFiles/afiedfile/2016/06/09/kamaishinojituzou.pdf (2019 年 10 月 25 日)
- 釜石市, 2019 a, 「釜石の人口・世帯 (令和元年 9 月現在)」
http://www.city.kamaishi.iwate.jp/shisei_joho/tokei_joho/jinkou/detail/1228350_2978.html (2019 年 10 月 25 日)
- 釜石市, 2019 b, 「撓まず、屈せずー復旧・復興の歩み 岩手県釜石市ー (平成 31 年 4 月)」
http://www.city.kamaishi.iwate.jp/fukko_joho/torikumi/ayumi/detail/_icsFiles/afiedfile/2019/06/04/ayumi.pdf (2019 年 10 月 25 日)
- 金妍姫, 2018, 「国際結婚女性のメディア活用と生活の転換経験: 中国出身女性を中心に」韓国研究センター年報 18 号, (九州大学韓国研究センター) pp.44-61
- 久保明教, 2019, 『ブルーノ・ラトゥールの取説 アクターネットワーク理論から存在様態探求へ』月曜社
- 神戸新聞, 「被災地学び合う夏」27 面 (2019 年 8 月 22 日)
- Latour, Bruno, 2005, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-network-theory* (=伊藤嘉高訳 2019 『社会的なものを組み直す アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局)
- 大野哲也, 2017, 「災害復興とツーリズム (1)ーネパールの世界遺産とアクターネットワーク理論」桐蔭論叢第 36 号, pp.139-146
- 大槌町, 2019, 「東日本大震災津波 [大槌町被災概要 (復興編) (平成 25 年 1 月 1 日現在)]」
<http://infra-archive311.jp/data/doc/kiroku/otsuchi.pdf> (2019 年 10 月 25 日)
- 大槌町, 2019, 「大槌町東日本大震災記録誌」<https://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/433179.html> (2019 年 10 月 25 日)
- 関幸子, 2013, 「岩手県大槌町の震災復興の現状と課題」東洋大学 PPP 研究センター紀要 3 号, pp.148-168.
<https://www.toyo.ac.jp/file/pppc/bulletin3/10.pdf> (2019 年 10 月 25 日)